

連載 10 「みんな同じじゃない！」

知的障がいの方々が暮らしている入所施設なんて聞くと、みんな全く同じ暮らしをしているのじゃないか？と考えている人が、まだまだ世の中には圧倒的に多いのではないのでしょうか？同じ時間に起きて、同じ時間に食事をとって、同じ時間におやつを食べ、同じ時間に眠る。食事は一斉に食べ始めて、一斉に終わる。お風呂も順番に決められた通り、時間を守って入る。なんていう風に…。

また、食事は残さず食べて、残せば叱られる。決められた就寝時間に寝なければ、叱られる。そんな風に考えている方も多いのではないかと思います。

さて、明星学園での暮らしは、今や世間の想像とは全く違うところにあります。もちろん時間の制約はあります。施設では、どうしても守らなくてはいけないことがあるからなのですが、それは、食事の時間と職員の労働時間です。食事は配膳時間から1時間以内に食べないと保健衛生上の法律違反になりますし、労働時間は週40時間以内を守れなければ労働基準法違反になるからです。

が、それらの法律に触れなければ、自分たちの工夫で限りなく自由な暮らしを組み立てることができます。何時に起きてきてもいいし、何時に寝ても構いません。少々食事の時間に遅れても全く問題ありませんし、お風呂も入るはいらないも本人に任せられています。食事では、嫌いなものは残して良いし、好きなものを購入して食べることも自由です。もちろん財源（お小遣い）による上限はありますが。

例えば、朝の食事風景はこんな風になります。A男さんは、朝寝坊ですが、決められた食事時間に間に合うようには目が覚めているようです。朝の着替えが面倒くさいのとお気に入りの服をずっと着たい彼は、パジャマを着ていないので、朝は起きれば、すでに食堂スタンバイ状態です。ところがすぐには、食堂に来ません。それは大声でしゃべっているB子さん、C男さんが食堂にいるからです。B子

さん、C男さんが食事が終わるころ、A男さんは食堂にやってきます。A男さんは生野菜とチーズが嫌いなので、代わりにお小遣いで購入した野菜ジュースとヨーグルトを支援職員に出してもらいます。メンバーさん方がまばらに座っている閑散としている食堂で彼はゆっくり食事をして、終わった後もしばらく職員の片づけや掃除を見えています。もちろん、叱られません。A男さんは、食事介助こそ必要がありませんが、配膳や片付け、また「生野菜やチーズが嫌いだから、違うものを食べたい。野菜ジュースやヨーグルトを代わりに出して欲しい」と伝えることや購入してある品を冷蔵庫から出してくることは独力ではできませんから、支援職員にとっては、決められた時間に食堂に来て、給食で提供された食事を好き嫌いを言わずに全部食べてくれることの方がどんなにか手がかからないか、ということになります。が、私たちはA男さんのこんな暮らしを応援し続けます。それは、次のように考えるからです。

「A男さんはわがままを言っているのではない」「自分らしい暮らしをしたいと思っているだけだ」「自分の人生は自分で決めることが一番大事なことだ」「幸せは一人一人違うから、一人一人違う形の支援が、応援が必要だ」「自分の決めたことを応援してくれる人がいる、それが生まれてきた理由だ」と。

北欧生まれの言葉ですが、ノーマライゼーションという概念があります。＜普通の暮らし＞と訳されますが、どんなに重い障がいがあっても、意思決定により主体的な人生を送ることが重要であることを指し示す言葉です。知的障がいがあることで、幸せを値踏みされるようなことがあってはなりません。「お前は知的障がいなんだから、お前の幸せはこんなものだ」ではなく、「たとえ知的障がいがあるとしても十分幸せになれる」がノーマライゼーションの考え方です。明星学園もその道の上を歩いています。